

明日香をさぐる

司馬江漢が見た飛鳥の風景① 四軒茶屋より望む

江戸のダ・ヴィンチとも称される司馬江漢。彼は紀行文『吉野紀行』で飛鳥の風景をスケッチしました。今回は、四軒茶屋からの眺めを紹介します。

司馬江漢は、江戸時代後期の洋画家です。延享4（1747）年、江戸の町家に生まれました。本姓は安藤ですが、のちに唐風の姓である司馬に改めました。幼い頃から絵が得意で、浮世絵、大和絵、南画（中国の絵画）を習得し、平賀源内との交友により、西洋画も習得しました。画家として遠近法をいち早く取り入れ、油絵や銅版画を日本で最初に確立させました。地動説を日本で初めて紹介し、世界地図を描いたり、望遠鏡や顕微鏡を作ったりと科学者の一面ものぞかせます。彼の絵画制作における信条は、風景を写生して「見たままを正確に写し取る」ことでした。

た。

彼は長崎をはじめ近畿一円を旅行し、道中で多くの作品を残しています。日本の風景を洋風画の手法で描く斬新さとその写実的な作風は人気を博し、後世の画家に大きな影響を与えました。彼は富士山を好んで描きましたが、一説では歌川広重の「東海道五十三次」のオリジナルを描いた人物とも言われています。

司馬江漢は、画業以外に文筆にも優れ、旅の道中を記した紀行文も書いていました。代表的なものに、長崎までの道中を記した『西遊旅譚』や『江漢西游日記』があります。これらの中には紀行文とあ

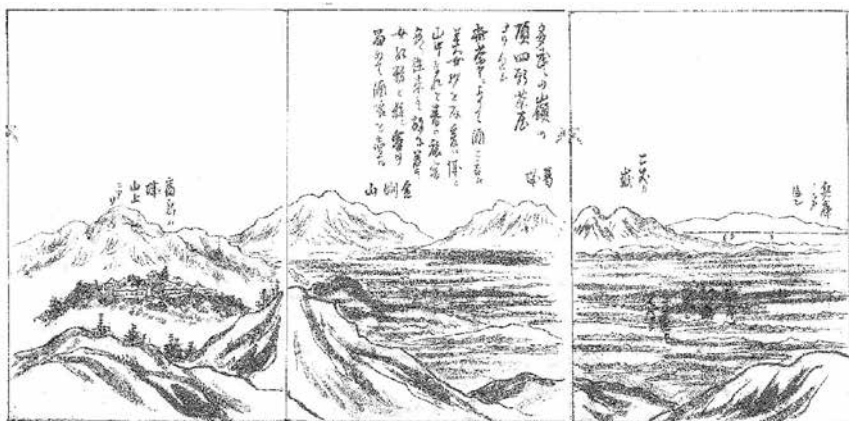
わせて長崎にいるオランダ人やその船、様々な鯨、鯨漁図、海や島々のスケッチを挿図として載せています。奇才司馬江漢の好奇心が満ちあふれています。

文化9（1812）年2月20日、司馬江漢は生涯の思い出に吉野の花を見ん、として江戸を出立します。その道中の記録が『吉野紀行』です。その道程をみると、彼は長谷寺をお参りしてから多武峰を登り、吉野一円を巡った後に飛鳥に立ち寄り一泊しました。その道中のスケッチなかに飛鳥に関するものが2枚あります。今回は、その内の1枚、冬野にあった四軒茶屋からの眺めについて、その道中とあわせて紹介します。

同年3月7日、桜井市の三輪、桜井町を過ぎ、多武の嶺の登り口、倉橋で麦飯酒を呑み、山を登っていきます。そして、多武の嶺にある四軒茶屋に着き、また酒を呑みます。そこで「多武の嶺の頂四軒茶屋ヨリ望む」と題して絵を描きました。その後、大職冠鎌足公の神廟や寺の僧房を見たところで、雨が降りだし、吉野の千股村で宿泊したところでその日は終わります。

この絵は冬野の四軒茶屋から飛

鳥、国中方面を望んだものです。遠く兵庫の海に二上山、葛城山に金剛山、近くは高取山上とその陣屋でしょうか。「樹木村落一面二平遠二見得る」という一文も添えています。風景画で名を馳せた司馬江漢がみた飛鳥の風景です。



出典…『司馬江漢全集一』（八坂書房）一九九二、205～207頁。

【明日香村教育委員会文化財課】